

研修報告書No. 17

所 属：杏林大学医学部付属病院 研修医

研修先：本山町立国保嶺北中央病院

大川村国保小松診療所

2016年1月、4週間に渡り高知県本山町立国保嶺北中央病院にて地域研修をさせて頂きました。その体験を下記の通り報告させて頂きます。

・県外在住医師から見た高知の地域医療の現状

私が高知に着き最初に驚いたことは、高知県内のほとんどが山間部で占められていることであった。東京での高知に対するイメージは、「温暖で、長い海岸線が伸び、その内陸に広い平野が続いている」といったものであったが、全く違った。空港から嶺北中央病院への道は、空港を出るとすぐに山間部に入り、険しい山々を縫うように走る高速道路をひたすら突き進んでいくといった様子であった。また私が研修していた時期が丁度そうであったが、山間部では雪が積もりやすく、通行止めになる道路も多かった。高知県の人口当たりの医師の数が多いにもかかわらず、医師の偏在が進み中心部から少し離れた地域では十分な医療が行き渡らない現状の原因は、そういった地理的要因が大きいのではないかと感じた。高知県内の山間部にくまなく医師や看護師、医療資源を常駐・常備することが困難であることは容易に想像でき、無医地区の医療までをカバーする為に、県内には幾つかの地域拠点病院があり、そこからの定期的な派遣がされているといった体制であった。

私が研修させて頂いた嶺北中央病院は、その地域拠点病院の一つであった。四国全体の丁度中央に位置し、周りを山々に囲まれ、病院のすぐ裏には非常に透明度の高い水が流れる吉野川が見られる。診療圏は本山町・大豊町・土佐町・大川村の嶺北4町村であり、人口は約13,000人、高齢化率45%といった地域であった。病院の病床数は131床であり、CT・MRI・透析室などの他にリハビリ施設などがあり、24時間体制受け入れ体制の救急医療も行っている。その他に無医地区の診療所や、通院が困難な患者自宅への訪問診療を行っている。私が何度か訪れた大川町国保小松診療所は、病院から車で30分～1時間程度で、病院よりもさらに山間部のところに位置していた。さらにそこからまた車で30分～1時間程度の場所に存在する黒丸地区には診療所はなく、公民館のような場所で診察をするといった様子であった。このような場所でも、80～90歳代の高齢者が生活していることに対する驚きと、当然ではあるが人が生活している以上こういった場所にも医療が必然なのだと感じた。普段勤務している大学病院では患者の方から受診しに来るのが日常であり、こちらから必要な医療を届けに行くという感覚が薄く新鮮に感じる一方で、本来医療とは人に尽くすものだという点で、それを強く意識させられる経験であった。

・研修内容に対する意見

今回の研修では、普段の大学病院では経験できないことを経験することが大きな目的であったと思う。研修内容は病棟業務の他に、各科の外来陪席、訪問診療、訪問リハビリ、診療所での診察、デイケア、放射線科研修などが主であった。外来陪席は、皮膚科や整形外科といった大学病院ではローテーションしてこなかった科を経験することができ、非常に有意義であった。訪問診療は、障害者施設や無医地区への訪問等多種にわたり、貴重な経験であった。診療所での診療は、普段当たり前のように行われている採血や画像検査ができない状況であり、患者の話や問診・診察がより重要だと強く感じる良い機会であった。入院患者の特徴としては、高齢者に多く見られる肺炎や心不全といった疾患や術後のリハビリ目的などが多かった。病棟や手術などの症例がどうしても少なく研修開始当初は物足りなさを感じることもあったが、今回の研修の本来の目的を考えればそれは重要なことではなく、結果として非常に充実した研修であった。

・今回の臨床研修で得たと考えられるもの

普段接することの少ないリハビリやデイケアなど多方面から患者と向き合うことができたことが一つの大きな経験であった。疾患や病態にしか注目していなかった視野が広がり本来の患者像を知ることができたと感じる。また、今後さらに高齢化社会が進むことを考えると自分の専門とする医療知識だけではなく、保健や福祉といった面の知識が重要になると強く感じた。

研修医という立場から考えると、幅広い内科的知識が複数の疾患の既往をもつ高齢者を診療していく上で重要であり、そういった知識不足を感じ、今後この地域研修の経験を意識しながら、励んでいきたいと思う。

今回研修するにあたり、嶺北中央病院・高知医療再生機構のたくさんの先生やスタッフの方々に支えられ、充実した研修生活を送ることができたことを、心から感謝申し上げます。